

立命館大学

国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM for WORLD PEACE

CONTENTS

スポット

- 2 ミュージアムの収藏品 50
関東軍記念写真帖

巻頭
つれづれ

- 3 **次世代へのお詫び**
 立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長
 安斎 育郎〔立命館大学名誉教授〕

館長だより

- 5 **「3.11」以降
 私たちはどこへ向かうのか**
 立命館大学国際平和ミュージアム館長
 高杉 巴彦

ここが
見どころ

- 7 **「平和」の善用のために**
 立命館大学国際平和ミュージアム副館長
 加國 尚志〔立命館大学文学部教授〕

運営委員
リレー連載

- 8 **災害予知システムと平和**
 立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
 原田 史子〔立命館大学情報理工学部講師〕

ミュージアム
おすすめの
一冊

- 10 畑谷史代 著
**『シベリア抑留とは何だったのか
 ー詩人・石原吉郎のみちのり』** (岩波ジュニア新書 2009年刊)
 立命館大学国際平和ミュージアム運営委員
 君島 東彦〔立命館大学国際関係学部教授〕

- 11 **第7回国際平和博物館会議に参加して**

- ミニ企画展 12 **開催報告** (2011年2月~6月)

事業報告

- 2011年度 春季特別展 世界187の顔 — 生命の現場から —
- 特別企画 写真パネル展 東日本大震災の現場から・安斎育郎名誉館長、福島原発被災地に行く
- 職場体験受け入れ「生き方探究・チャレンジ体験」
- NGOワークショップ開催
- 夏休み親子企画「へいわ」ってなに?? 2011
- 『カティンの森』DVD上映とレクチャー
- 小中学校教員対象下見見学会2011
- 第5回国際平和・人権連続セミナー～平和の諸相を見る～
- 日本平和博物館会議加盟館の紹介・第1回 ピースおおさか (大阪国際平和センター)
- ボランティアガイド活動日誌
 立命館大学国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会 谷川 佳子
- 平和へのメッセージ常設展示見学者の感想—
- 2010年度入館者状況 (2010年4月~2011年3月)、編集後記
- ミュージアムインフォメーション

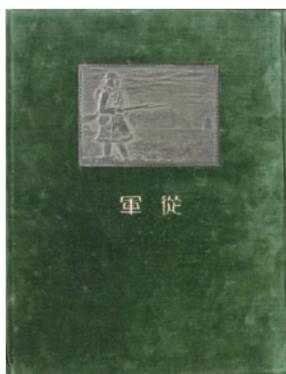


日本平和博物館会議
 ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE



立命館大学
国際平和ミュージアム
 Kyoto Museum for World Peace,
 Ritsumeikan University

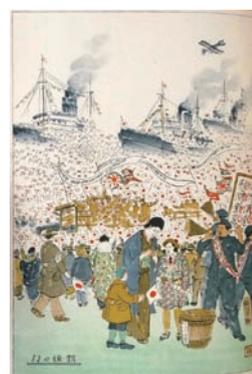
關東軍記念寫真帖



表紙
縦24.5cm／横10cm／厚さ3.8cm
年代：1932年



ハルビン占領迄の1頁



銃後の力

これは、1932（昭和7）年に満洲事変を記念して關東軍司令部が発行したアルバムです。

濃緑のピロードの表紙、背文字には「關東軍記念寫真帖」と刻まれ、表にはレリーフと「從軍」の文字があります。見開き両面にわたる見返しは、荒涼とした大地に稲妻が光り、雷鳴が聞こえてきそうな風景画です。これをめくると今度は一転して色鮮やかな赤の扉（本号の表紙参照）です。中央に「昭和六、七年満洲事變 關東軍記念寫真帖」とあり、劇的な演出がほどこされています。

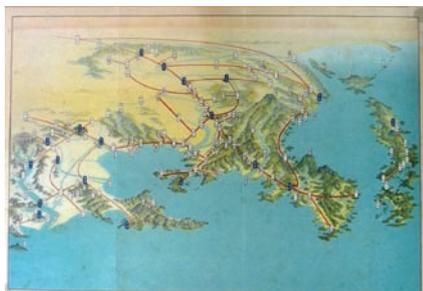
關東軍司令官本庄繁による「巻頭の辞」には、以下のように記されています。

「…本写真帖は、我國民の熱誠なる純情篤志を籠めて贈られたる恤兵金の一部を割き主として事變の発端より約半歳に亘る状況を蒐録し以て事變の記念として出動將兵に領ち其厚志を不朽に伝ふるよすがとなすものなり」

事變の発端からその後の経過を記録し、事變に参加した將兵がこれを永久に伝える手立てとなるように、恤兵金、つまり、兵士の慰問目的で集められた資金の一部を使って作られたアルバムです。

では、關東軍は満洲事変をどう伝えているのでしょうか。地政学的認識、事變の正当性、顔のない兵士、銃後へのまなざしが特徴的です。

「巻頭の辞」に続く折り込み地図は、ハノイ上空辺りから眺めたような構図ですが、九州を中心に日本列島は膨らみ、日本海を挟んで、朝鮮半島と中国大陸沿岸の環状に対置されています。東京から下関へ下り、海を越えて朝鮮半島を上がり満洲へ入る鉄道網はすごろくのようにつながっています。大連や上海もこれら地域に近づけられています。



地図

朝鮮半島は日本の中国大陸侵略の足がかりであり、鉄道はそのための具体的な手段でした。この地図には彼らの地政学的な空間認識が現れています。

地図に続いて、当時の天皇の肖像と「關東軍に賜はりたる勅語」、天皇と皇后の参拝の様子、参謀らの肖像写真や書が何ページにもわたります。また、その後の「奉天に於ける諸將軍の会見」では、中国での排日運動や中国側の戦争準備の証拠なるものを示し、満洲事變は天皇のもとで、中国側からの攻撃を打ち砕く聖戦として行ったと主張しています。

その後、「齊々哈爾濱方面を中心に」、「錦州政權の撃攘を中心に」、「哈爾濱占領迄」では作戦中の様子が伝えられます。占領した都市を警備する様子や、荒野を歩く様子など、多くの兵士が写っています。ところが、その表情は読み取れません。作戦中の撮影で自由が利かないこともあるのかもしれませんが、顔のない大群です。

これは、それに続く「陣中風景」や、「銃後の力」において、人々の表情が時に生き生きと捉えられていることと比べるとよくわかります。個人の顔がないという点では、戦死者名簿をのせた「護国の神」の項にも、遺影はありません。しかし、黒紙に白抜きで文字で戦死者名を記す凝りようです。

アルバムは、「銃後の力」、「満洲建国」と続き、詳細な年譜である「満洲事變に於ける關東軍行動の概要」で終わります。「銃後の力」は、慰問や献金等を通して銃後の人々が満洲事變を支持する様子を伝えるものです。「從軍」と題したアルバムにこの項目を入れるのは、國民の事變に対する支持を宣伝しようとしたものでしょう。

周知のように満洲事變とは、1931（昭和6）年に瀋陽に近い柳条湖にて南満洲鉄道の線路が爆破され、それをきっかけに日本の利権を守ることを名目に關東軍が中国東北部を占領し、これを満洲国として独立させた事件です。その後、鉄道の爆破は關東軍による自作自演であったことがわかりました。国際連盟は満洲国の建国に正当性を認めず、1933（昭和8）年、日本は国際連盟を脱退しました。今年は、満洲事變から80周年にあたります。

（学芸員 兼清順子）

次世代へのお詫び

立命館大学国際平和ミュージアム

名誉館長 安斎育郎

（立命館大学名誉教授）

福島原発事故の喧騒の中で

2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震とそれによる巨大津波が引き金となって、東京電力福島第1原発の複数の原子炉施設が同時並行的に危機に陥るといって、人類史上初の深刻な事態が起きました。危機はなお継続中です。もともと原子力工学、とりわけ放射線防護学を専門とする私も、マスコミ攻勢や講演・執筆依頼で喧騒に巻き込まれました。

原発事故は、なかなか厄介です。

第一に、放射線被曝の恐れがあって、事故現場を直接目で確認することもできません。実態が正確に把握できないので、対策も手探りの対症療法にならざるを得ません。

第二に、「透明の恐怖」とでも言うべきでしょうか、目に見えない放射線の不気味さです。私が事故から5週間目の4月16日に現地に入った時も、黄色い菜の花が群生し、満開の桜が春を謳歌し、^{こぶし}辛夷の花が美しく咲き、原発事故だと知らなければ^{のどか}長閑な日本のふるさとの原風景そのものです。

第三に、それが原子炉内にあれ、原子炉外のプールにあれ、使用済み核燃料に内蔵された膨大な放射性物質は、マイペースで何百年、何千年、何万年と熱を出し続けます。水をかければ「消火」するようなものではないのです。火災は水をかければ消えますが、核燃料の場合には発熱はまったく影響を受けません。水をかけ続けるのは、核燃料が溶けて内部の膨大な放射能が出てこないように、過熱を防いでいるだけです。だから、冷すことは至上命令ですが、福島原発事故では「水をかければ漏れる」という事態が起きました。これ以上の多量の放射能が環境に放出されないことを期待するばかりです。

涙ながらの電話相談

福島のお母さんから、涙ながらの電話相談がありました。子どもたちが放射能で汚染された河川敷で毎日サッカーの練習をしていてとても心配なこと、表層土を削りたいが業者に頼むと一千万円もかかり、負担をめぐっては保護者にも異論があること、行政が河川敷

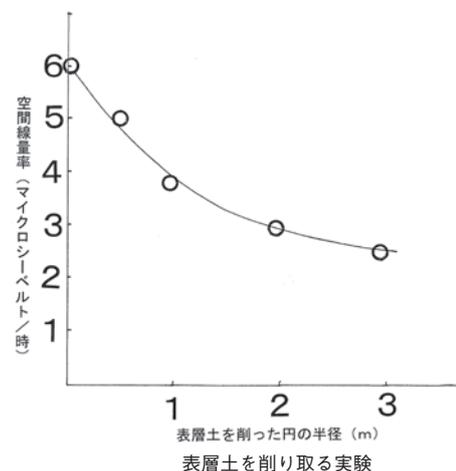
の使用を認めているのだから「安全」と考えていいのではないかという考えの人もいて足並みが揃わず、保護者の間の対立感情もあって途方に暮れていること—そんな訴えです。

いま子どもたちの被曝の主な原因は、事故の初期に起きた水素爆発により放出されたセシウム137などの放射能が大半で、現在も毎日空から多量の放射性物質が降り続けている訳ではありません。これを削り取れば放射線のレベルは確実に減ります。

私自身も5月8日、福島市内の保育園で園庭の表層土数 cm を削り取る実験を行い、地上での放射線レベルが顕著に減少することを確かめました。グラフは、横軸がグラウンドを削った円の半径で、縦軸が地上の放射線のレベル（マイクロシーベルト/時）です。



福島市の保育園の園庭で表層土の除去実験を行なう筆者（左から3人目）
（2011年6月8日）



土を削り取るのは、「人力」でOKです。鋤、鍬、スコップ、バケツ、手押し車（乳母車でも三輪車でも自転車でもいい）を用いれば簡便に実施できます。もちろん、広い面積を削るのは大変ですが、子どもたちの安全のために、毎日少しずつでも実行すれば、きっとそれだけの効果が得られます。

削った土は、グラウンドの片隅に穴を掘ってそこに埋め、表面にビニールシートなどを施して立ち入りを制限すれば十分です。汚染表層土を埋めた穴の上には鉄板などの金属を置けば放射線遮蔽効果が期待できますが、費用がかかるので、津波でスクラップ化した車両などを利用して構いません。

「政府が定めた安全基準以下なら大丈夫ではないか」という意見もありますが、年間20ミリシーベルトという基準はかなり高いレベルです。100ミリシーベルト程度浴びると癌が0.5%ほど増加する可能性があると言われますが、年間20ミリシーベルトの5年分ですね。「放射線は被曝しないに越したことはない」という原則からすれば、どこかに線を引いて、「これより上は危険」とか「これより下なら安全」とかいう発想は、放射線防護学の原則には合わない考え方で、基本は「出来るだけ低く」ということに尽きます。子どもたちが未来に向かって負うリスクを極力少なくしてあげるには、私たち大人が可能な限り低いレベルの放射線環境を創り出してあげることが大切でしょう。今度の事故に子どもたちの責任はありません。私たち大人社会が今度のような事態を防ぎきれなかった責任を償うためにも、やれる手段を尽くしてより安全な環境を取り戻してやるのが大切だと思います。

私はチェルノブイリ原発事故の後、『「がん当たりくじ」の話』（有斐閣、1988年）を出版しましたが、不謹慎を承知で、「放射線を浴びるのは、がんが景品であたる宝くじを買うようなもの」と説明しました。ただし、宝くじは「当せん発表日」が決まっていますが、放射線のがん当たりくじは「生涯有効の宝くじ」で、「当せん発表は賞品発送をもって替えさせていただきます」流です。一生持っているうちにいきなり「がん当せん通知」が送られてくるものです。当せん確率はそうは高くないかもしれませんが、私たちは「買いたくもないがん当たりくじを買わされてしまった」現実を目の前にしています。だから、これ以上子どもたちが不本意にがん当たりくじを買わされることのないように、出来るだけそれを除去してあげることが私たちの務めだと感じています。

私は40年以上も原発政策を批判する側に身を置いてきたため、大学生活では不快なハラスメントも体験しました。だから、確かにこの国の原発政策を推進してきた立場にはありませんが、それでも結局このような破壊的な事故を防ぎきれなかったことを原子力の専門家として非常に申し訳なく思い、科学者あるいは社会活動家としての力量のなさを恥じています。せめて起こってしまった事故の影響が将来の子どもたちになるべく及ばないように、専門家として可能な社会的発信はしたいと思って、3月の段階から「表層土を削る」ことなど、実効的な放射線防護策を遅滞なく実施するよう提言してきました。いま徐々に実施されつつあるのを感じます。

■ 立命館宇治高校での授業で

6月20日、21日、立命館宇治高校で講義をする機会がありました。原発問題がテーマです。折から6月20日付の朝日新聞が、「イラク 核汚染の影」「ウラン容器 貯水に転用の村」「8年経ち がん続発」と伝えていました。バグダッド郊外のアルフルディエ村の村民が、イラク戦争の混乱のさなかの2003年4月、近くのツワイサ原子力研究センターから放射性物質が入った容器を持ち出し、貯水タンクなどとして用いていた結果、8年後にがんが続発しているというのです。例えば、サルマン・フメイドさん一家は、イラク戦争後2人の兄弟と姪の3人をがんで亡くし、現在も妻が乳がんを苦しんでいるというのです。もちろん、こうした個別の事例だけでは放射線被曝と発がんの因果関係は断定できませんが、当事者にとっては「あの容器を使ったのがいけなかったのではないか」という悔いが残るでしょう。

私たちは、未来の世代に負の遺産を残してしまいましたが、これ以上リスクを増大させるようなことのないように、「後悔先に立たず」の諺を心に刻んで、いま出来ることを迷わず実行することが大事だと思います。破滅的な原発を招いてしまった世代として、未来の世代にお詫びするとともに、負の遺産を極小化することがせめてもの未来の世代に対する責任の取り方だと感じます。

「3・11」以降 私たちはどこへ向かうのか

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 高杉 巴彦

「3・11」で見えてきたもの

「3・11」の東日本大震災の巨大地震と大津波によって、1万5千人を超える死者と、5千人もの行方不明者をだし、10万人にのぼる人々が避難生活を余儀なくされることとなりました。この東日本大震災によって引き起こされた東京電力福島第一原子力発電所の未曾有の事故は、実は単なる自然災害による事故ではなく人災そのものであったことが、今や多くの国民の知るところとなっています。

また事故後1週間の間に原子炉が「メルトダウン」となり、大量の放射性物質の放出があったことも、2カ月以上たつまで一般には全く知らされず、その間に多くの被曝者が生み出され、その後も汚染地域が拡大し、土壌や水、食物まで汚染被害を大きくする事態となりました。「不安感」によるパニック状態の発生を嫌って、情報をきちんと出さず、「株主保護」を優先する東京電力の存続や、経済活動の低下を考慮して、「人間の生命と安全」を第一にすることを大きく損なう政治のあり方が露呈しました。正しい情報を的確な対応方針とともに提示する力量を持っていない場合でも、利害関係や原発関係者の自己保身による対応を克服する姿勢だけでも、せめて示せなかったのでしょうか。

今回の事態で、日本のエネルギー政策の根本が問われました。CO₂を出さず夢のクリーンエネルギーであるとか、発電経費が安いなどの、原発のメリットとされてきたことがらは、事が起こってみれば、事故処理や被害補償また放射性廃棄物の処理コストなど、とてつもなく割高であり、当事者たちの想定を超えた有害さであったわけです。

「3・11」以降、それまで原発エネルギー増加の方向にあった世界の動向は、明らかに変化し、「ヒロシマ、ナガサキ、フクシマ」として、「フクシマ」が「脱原発」の象徴となりました。ドイツは2020年までに原発廃止を決め、スイスも新しい原発中止、イタリアは原発

からの撤退が国民投票で決定となり、オーストラリアも原発は不要との見解を持っています。フランスは原子力発電推進ですが、安全強化政策を打ち出すことによって切り抜けようとしています。中国は2020年までに原子力発電を「大躍進」させる中長期計画でしたが、安全審査に合格しない場合の計画中止や、緊急時避難先の検討などの厳格化方針を急ぎ打ち出しました。しかし、2011年4月のIAEA（国際原子力機関）の原子力安全条約第5回再検討会議では、各国の思惑が交錯して、日本への情報公開と終息努力への要望、各国の安全強化策の表明にとどまっています。

「3・11」と日本の意思決定の仕方

「3・11」以降、私たちに、地球上で人類が永続的に活動していくための課題が突き付けられました。あらためて「人間存在の安全」を正面に据える決断と、そこから逃げない決意が迫られています。

かつて戦争に反対した人や戦争の拡大に懸念を表明した人、また戦争遂行が無謀であることを認識していた人々は少なからず存在しましたが、結局「国民総動員体制」にマスメディアもあげて突き進み、軍国教育や皇国教育が科学的認識による判断を停止させていきました。「なぜ戦争が起こったのか」は、日本国民にとって本当に教訓化されたのでしょうか。経済不況下の植民地拡張意識、政治不信と政党政治の崩壊、挙国一致体制など、軍部の横暴に帰するだけではない、今日にも通じる、国や国民のあり方についての教訓があるでしょう。

原子力発電所の事故について、これまで日本でも度々起こっており、その安全性やメリットの正当性に反対や懸念を表明した人々がいたにもかかわらず、なぜこうなったのでしょうか。CMにも協力してきたメディアの責任も含めて、日本のあり方として問いなおす時ではないでしょうか。

70年代初めのオイルショックの時、「狭い日本そんなに急いでどこへ行く」や「資源には限りがあるのです」という言葉が流され、エネルギー資源や環境問題が問われたはずでした。しかしその間に、鹿児島をはじめ各地に巨大な石油備蓄基地がつくられ、一方では原子力発電所の建設が急速に進められました。ハイブリッド自動車の開発などの、環境問題に対応できる企業準備と並行して原子力発電の開発がなされ、根本的なエネルギー政策は「人間の生存と安全」を前提とはされませんでした。

1989年以降の冷戦構造の終焉や2001年の「9・11」以降も、日本はその都度、当面の対応策をとるだけで、政治・経済を含め国のあり方を根本から見直して、新たな世界の構造変化に的確に対応する日本へと転換しませんでした。日本社会のあり方として「人間存在の安全と地球の持続的発展」を「原点」に据える「決断」を、今までしてこなかったわけです。

■ 「人間存在の安全と地球の持続的発展」をめざして

今回の原発事故を通じて、私達には「人間の生存」をめぐる「人間のあり方」の問題が提起されました。

地球史の中で人類は「思惟する最高の存在」として出現しました。したがって、人類は地球と結びついて、地球の生態系の中で、地球資源や地球環境と折り合いながら、今後も継続的に生存していかなければなりません。人類と地球上の生命と地球全体の力量を全面的に発揮させ、その持続的発展を保障することが、すべての人間の行動の中心軸に据えられることが重要でしょう。

それこそが「地球市民」の概念であり、単なる世界に活躍する「グローバル人材」でもなければ、国際的な関係を持つだけでいいというだけでもありません。

原子力エネルギーは、天体レベルでは核エネルギーとして自然に存在するものですが、地球上においては人工的につくられ制御困難なエネルギーであります。

近代文明と技術開発は、産業革命以来、自然を開発し自然を克服する形で進んできました。しかし結局は、地球資源はもちろん生態系の中の動植物の営みに依拠

した生成物の恩恵にあずかっているわけです。現在は、人工的な光や空気、熱、肥料・栄養剤等による植物栽培もあり、また養殖や人工飼育などがありますが、これとても大地や生態から全く無縁で生成されるわけではありません。

地球の生態系や地球資源に依拠した、有限で再生・循環型の人間活動を前提にして、人間の生産・消費活動を組み立てていくことが、「持続可能な地球と人類社会」のあり方となるのでしょうか。エネルギー問題も世界全体で、石炭・石油・天然ガス・水力・揚水・地熱・太陽電池・風力・バイオマス・水素などの燃料電池・海洋エネルギーなどを駆使しつつ、協力し合って10年20年計画で、基幹エネルギーを再生可能エネルギーに振り替えていく枠組みが必要です。国家間の戦略に利用され、経済性を優先する発想は、今回大きく破たんしたわけです。世界の資源とエネルギーを世界共通にコントロールしていく「叡智」を発揮する段階に来ているでしょう。

世界経済でも、現在、金融資本によって、現実の生産や人間の営みに依拠しない、果てしないバーチャルな投機的金融商品が生み出され、その人工物を世界がコントロールできず、世界経済が「メルトダウン」しそうな状況があります。

今まで、世界の経済活動は、地域格差を前提として成り立ってきました。安い労働力を活用しての競争力強化や、化学工場や原発などの巨大開発を、低開発地域での雇用促進や生活施設の拡充の魅力で行うなど、世界や国内のいわば「落差」を活用して発展してきました。

世界が先進国をめざして活動し、いつか共通のレベルになった時、これまでの経済活動の「うまみ」はなくなります。その時の地球のあり方を想定すると、「地球の持続可能な発展」のための経済・エネルギー・資源についての活動のあり方とともに、「環境とエネルギー問題に配慮した消費生活のあり方」についても、世界に先駆けた形で創りあげることが「決断」することが、世界に誇れる新しい日本のあり方を形成することになるでしょう。

「平和」の善用のために

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 加國尚志

(立命館大学文学部教授)

「世代間倫理」あるいは「世代間責任」という言葉があります。環境倫理や生命倫理の議論でよく使われる言葉で、ナチスに母親の命を奪われたユダヤ系のドイツ人哲学者ハンス・ヨナスが主張したことで知られています。

私たちは、同時代を生きている人間たちだけではなく、後に続く世代に対しても責任を負っています。たとえば、私たちがいる天然資源を消費し尽くして、次の世代がその資源を利用できなくなるようにしてしまうことは、後に続く世代に不利益を及ぼすという点で倫理的に批判される行ないです。

最近いたるところで耳にする「持続可能性」(サステナビリティ)という言葉も、こうした「世代間責任」の文脈で理解されるべきでしょう。どんなに繁栄したとしても、一世代だけがその恩恵を享受し、後の世代はその「ツケ」を払わされるような経済成長は、世代間責任という観点からはまちがった発展であったこととなります。

環境問題だけではなく、教育の中にも、この「世代間責任」と呼べるものがあります。過去の世代の経験や知識を、次の世代に伝えていくことは、とてもたいせつなことです。来るべき世代の子供たちがまったく白紙の状態です。世の中の困難にぶつかり、前の世代の失敗を繰り返してしまわないためには、過去の事実や経験を忘れずに伝えていかなくてはなりません。

2011年3月11日に起こった東日本大震災は数多くの人命を奪い、今なお多くの人々が避難生活を余儀なくされています。私たちは大きな衝撃を受け、心の傷口が開かれるのを感じています。私は、まだその衝撃をうまく言葉にできません。

今回の大震災は福島第一原子力発電所の事故という事態を招いた点で、私たちが未だかつて経験したことのない危険や不安を産み出しました。私たちは、これから長い間、放射能という見えない恐怖と向き合わねばなりません。長期にわたる健康への不安や環境破壊の影響など、後の世代に対してたいへんな負債を負わせてしまうことになりました。

日本は広島・長崎で原子爆弾の被害を経験しました。その殺戮と破壊の凄まじさと放射能の恐ろしさを世界に向けて訴えていくことは、再びこの破壊兵器を使用させないための、したがって次の世代をその被害から守るための「世代間責任」として意識されていたはずで

す。しかし、その日本で原子力発電が推進され、結果的に今回の事故を招いたことは、反原発を唱えた人たちもいたとはいえ、私たちの意識に何か欠けているところがあったのではないかと、という反省をうながします。

経済発展のためのあくなき欲望や科学技術への過信という要素がそこにあったことはたしかでしょう。「国策」としての政治権力の働きがあったことは言うまでもありません。

それでも放射能の恐ろしさを誰よりも知っていたはずの日本人に原子力発電を容認してしまう心理的な免責感を与えたのは、原子力の「平和利用」という、今となっては忌まわしい言葉であったように思われてなりません。

原子力発電は原子爆弾のように兵器として戦争目的のために原子力を利用するのではない、それはエネルギー供給によって繁栄した社会を作り出すのだ、というスローガンに「平和」という言葉が当てはめられたときに、巧妙なすり替えが行われていることに私たちは気づいていたと言えるでしょうか。

「平和」が戦争のないことを意味するだけなら、原子力発電はたしかに「平和」的であるように見えます。しかし、「平和」ということで、私たちが生命や健康の危険にさらされることなく、ある土地に安心して居住できることを意味するのだとしたら、どうでしょうか。原子力発電所がひとたび事故を起こせば、とても「平和」と呼ぶことのできない状況を生み出してしまうことはそもそも明らかでした。そして、後の世代に放射性廃棄物を大量に押しつけることになる以上、それは世代間責任という観点からも、倫理的に許されないエネルギー生産技術であったと言えるでしょう。

広島と長崎の原子爆弾投下、日本が米国を支援したイラク戦争での劣化ウラン弾の使用とその惨状。こうした原子力や放射能の戦争利用と、福島原発事故を並べて展示しなくてはなりません。そのとき、国際平和ミュージアムの物言わぬ展示品たちが、私たちに、次世代に伝えるための「平和」概念を問いかけてくるにちがいありません。

この問いに答えるために、「平和」という概念を自明なものと思わずに、思考をうながされる場所。3.11以降、国際「平和」ミュージアムの世代間責任は、そのような場所であることによってしか果たされえないと言えるでしょう。



浦上天主堂の被爆した聖像の顔面部

災害予知システムと平和

立命館大学国際平和ミュージアム

運営委員 原田 史子

(立命館大学情報理工学部講師)

はじめに

立命館大学国際平和ミュージアムの設立理念には、「平和な社会を実現するために、『平和創造』の面において大学が果たすべき社会的責任を自覚し、『平和創造』の主体者を育むこと」が含まれます。「平和創造」はそれほど新しくありませんが、挑戦的な社会的課題であると言えます。一方私が所属する情報理工学部の設立理念には、「情報科学に基づく多様な分野の学習成果、研究成果や知見を活用して、『様々な社会的課題を解決する』人材を養成すること」が含まれます。となると、情報理工学部の研究で扱うべき社会的課題として、多分に「平和創造」が含まれることでしょう。本稿では、情報理工学部の研究成果の一つである災害予知システムに関して、これが平和創造にどのように貢献するのか、また貢献のために今後何が求められているのかを、徒然にまかせて考察してみたいと思います。

災害予知における危険とリスク

“平和”なる言葉の辞書的な定義（大辞泉による）に基づく、“平和な社会”が目指すべき理想の一つに、「社会の全ての構成員が心配や揉め事を持たず、平穏に生活できる」が挙げられます。この理想を達成するには、全ての構成員が生活上の危険（danger）かそれによる被害を回避できるか、または少なくとも期待できることが必要です。そうでなければある構成員は常に、不可避の危険かそれによる不可避の被害に対する心配を持って生活することになります。自らの選択で危険が被害を排除できるようにし、危険をリスク（risk）に変えることで心配をなくせます。危険とリスクの違いは、ある因子が受動的に甘受せざるを得ないものが、能動的アクションによってある程度緩和・回避できるかという点です（神里達博、「社会はリスクをどうとらえるか」『科学』、Vol.72 no.10, pp.1015-1021）。被害の要因に関しては、これを危険ではなくリスクに変えることが平和達成に必須であると言えます。心配の要因となる危険の一つに、地震などの自然現象による災害があります。

上述した自然現象の一つに、豪雨による山の地すべりが挙げられます。地すべりは地中の水分量が豪雨によって飽和し、斜面上の摩擦が減少することで発生します。例えば斜面に面した道路が外部との唯一の交通であるような地域では、地すべりにより道路が遮断されると、地域が孤立して物流がなくなり、著しい経済的被害を引き起します。同様の例として青森県下北郡

の風間浦村では、道路に面した山の岩盤崩壊が同様の被害を起こしうることから、岩盤崩壊を事前予測し報知するような防災システムが設置されています。山の地すべりに対しても同様のシステムがない場合、地域住民は、不可避の危険と被害に対する心配を以下のように持つでしょう。

- (1) 地すべりが起こるのか、それとも起こらないかわからない
- (2) 地すべりがいつ起こるかわからない
- (3) 地滑りが起こった場合、生活にどのような悪影響があるかわからない

我々の研究室では、山の地滑りの被害を阻止するシステムの構築に取り組んできました。本システムでは、山の斜面上に乾電池で駆動する小さなコンピュータ（センサノード）群を多数配置し、斜面上の各地点における地中の水分量の変化をこれで計測し、計測データを集約・分析しています。豪雨時は、水分量の増加具合から地すべりがもうすぐ起こりそうか否かを予測し、起こりそうであれば周辺住民にそれを報知します。反対に雨が止んだ後は、水分量の減少具合から地すべりの危険が去ったか否かを予測し、去ったのであればそれを報知します。これによって上記(1)(2)の心配を解消できると期待できます。

ただしかかる地域では、我々のシステムが地すべりの発生予報や予報の取り消しを周辺住民に報知すると同時に、報知を聞いた地域の責任者が道路の危険箇所を閉鎖したり開放したりするという運用になります。なぜなら地すべりという危険自体が不可避であり、そのゆえ被害を回避するには道路を封鎖するほかないためです。このとき地域住民は、本システムの地すべり予報から解除まで地域内で待機せねばなりません。かかる文脈では、周辺住民は以下のような理由から心配を感じるでしょう。

- (1)' 地すべりが起こるのはわかるが、いつ起こるのか詳しくわからない
- (2)' いつ地滑りの危険予報が解除されるかわからない
- (3)' (1)'(2)' から、したがっていつまで地域内で待機せねばならないかわからない
- (4)' (3)' から、長期間待機すべき場合、生活にどのような悪影響があるかわからない

本システムを作成する上で最も難しいのは、空振りの予報をしないことと、適切に予報を解除することです。予報を解除したあとで地滑りが発生するとシステムは信頼を失います。一方で、予報を出したものの地滑りが実際に発生しないまま長期間解除しないしていると、地域住民の心配は増すばかりです。岩盤崩壊予測システムの管理者へのインタビューによると、このようなシステムで一度予報を出すと安易に解除できず周辺住民の不安が高まり、実際に岩盤崩壊が起こって解除できたときはむしろ管理者側が安堵したそうです。これは、地すべりによる災害が、周辺住民にとっての危険(自分では対処・制御できないもの)からリスク(やり方によって一システムの予報にしたがうことで一対処・制御できるもの)になったことで、古い心配は消えたが新しい心配が引き起こされたと言えます。(1)'-(3)'については、長期間の計測データを用いて分析方法を洗練させることで実現できると考えられます。一方(4)'については、現行のシステムでは対処できません。これはシステム導入前の心配(3)が、システムの導入によってより高められたものといえます。

このシステムは地域住民の危険をリスクに変えるものですが、システムの管理者にとってもリスクは存在します。本システムで管理者が行うことは、システムが計測した過去の計測データを大量に解析して、地すべり予測の分析時に必要な計算パラメータの設定を行うこと、および斜面に設置したセンサノードの故障や電池切れに対応して、定期的・緊急的にメンテナンスすることの二点です。この点で管理者には

- (a) 自身のパラメータ設定によって、本当に有効な地すべり予報が実現できるかわからない(リスク)
- (b) いつシステムの故障やセンサノード電池切れが起こるかわからない(危険)
- (c) 故障や電池切れに対処するため、危険な場所に立ち入らねばならないが、もしかすると地すべりが起こるかもしれない(危険)

という心配が生じ得ます。(a)については、有益と判明した過去の計測データの事後分析によって一部解決できるものの、専門家の意見も取り入れながら、システムの運用方法と合わせて検討していくこととなります。(b)については、計測データから故障や電池切れを推測・予測し、それを管理者に提示することで解決できます。そのための推測・予測手法が必要となります。(c)は不可避ですが、コンピュータの消費電力を小さくしたり、計測データを事前分析してあるセンサノードの故障時に代替候補となる他のセンサノードを事前抽出しておくことで、故障や電池切れの対処頻度を減らすことで、現在解決を目指しています。

■ 心配を起こさない予知システムのための今後

前節の考察から、

- (A) 地域住民が長期間地域内で待機すべき場合、生活にどのような悪影響があるのかわからない(危険)
- (B) システム管理者が過去の計測データを解析して、地すべり予測分析の計算パラメータを設定するときに、本当に有効なパラメータかどうかかわからない(リスク)

という心配の解決が必須となるでしょう。

これらはいずれも、地域住民とシステム管理者の間でリスクコミュニケーションを行うことでしか解決できないと考えられます。リスクコミュニケーション(Risk Communication)とは、リスクに関する正確な情報を関係者間で共有し、相互に意思疎通・合意形成することを言います。これにより(A)はリスクに変わると考えられます。リスクコミュニケーションにおいては、

- (A)' どの程度の期間地域内で待機を強いられると、どのような悪影響があるのか
- (B)' システムの信頼性を保ちながらも地域住民が許容しうる悪影響しか与えないような計算パラメータ設定が必要であるが、周辺住民にとってのシステムの信頼性、許容しうる悪影響とは何か

が興味の対象となると考えられます。となると、特に上記の点に関して情報を共有しやすくする、あるいはその検討に必要な情報を提示するような、情報システムが今後必要となると考えられます。実際近年、リスクコミュニケーションを支援する情報システムがいくつか開発・研究されていることから、かかるシステムの有効性が言えます。ただし我々が対象とする地すべり被害に関するリスクコミュニケーションにおいては、単に(A)'(B)'の情報を地域住民とシステム管理者間で共有するにとどまりません。この後システム管理者は、(A)'(B)'に対応した計算パラメータ設定を実現する必要があります。そのためには過去の計測データを計算パラメータ検討に有効な方法で提示することや、求められる信頼性や許容しうる影響を達成するための計算パラメータ設定基準を示す機能が必要となります。具体的に何が「計算パラメータ検討に有効」で、何が「計算パラメータの設定基準」となりうるかは、一旦(A)'(B)'の情報を共有するだけの機能を持つシステムを用いて、あるいは仮想的にリスクコミュニケーションを行ってもらって知見を得るしかありません。またその一方で、先に述べた地域住民の心配(1)'-(3)'やシステム管理者の心配(b)を解決する方法も必要となり、平和達成には非常に長い道のりとなりそうです。

『シベリア抑留とは何だったのか——詩人・石原吉郎のみちのり』

畑谷史代著（岩波ジュニア新書 2009年刊）

立命館大学国際平和ミュージアム

運営委員 君島東彦

（立命館大学国際関係学部教授）



戦後日本は長らくシベリア抑留者を見棄ててきた。ようやく昨年2010年6月16日、「戦後強制抑留者に係る問題に関する特別措置法」(通称、シベリア特措法)が成立し、シベリア抑留者に対して特別給付金を支給し、シベリア抑留の実態調査をすることが決まった。戦後65年たって、やっと20世紀の巨大な暴力の1つ

を克服するプロセスが始まったのである。

わたしは、シベリア抑留について考えるとき、欠かせない人物——いずれも抑留経験者——が4人いると思う。高杉一郎（著述家、1908-2008）、香月泰男（画家、1911-1974）、石原吉郎（詩人、1915-1977）、内村剛介（ロシア文学者、1920-2009）である。ソ連の強制収容所で極限状況を経験した彼らは、極限状況における人間を知り、そこから人間と社会に対する鋭い観察、深い認識に到達した。本書は詩人・石原吉郎に焦点を当てるものである。

いま石原吉郎はあまり読まれないが、かつて石原がよく読まれた時代があった。1969年6月に自殺した立命館大学文学部学生、高野悦子の日記『二十歳の原点—二十歳、最後の日記』（新装版、カンゼン刊、2009年）には、石原の名前が何度も登場する。高野は石原のエッセーと詩にひかれた。大学紛争の頃から、全共闘の若者を中心に石原のブームが起きた。しかし1977年に石原が亡くなり、1980年代に入ると石原は急速に忘れられていった。

信濃毎日新聞の記者、畑谷史代は、沖縄の小説家、目取真俊の話がきっかけで詩人・石原吉郎のことを知ったという。畑谷は、人間と戦争に対する石原の深い洞察にひかれた。石原吉郎がシベリア抑留体験のなかに見ていたものは何か、そして、戻ってきた戦後日本に、何を思ったのか。畑谷は、石原の足跡をたどり、ゆかりの人びとを訪ねて、2007年10月から2008年5月まで、信濃毎日新聞に全31回にわたる連載記事を書いた。本書はこの連載記事をもとにまとめられたものである。

石原はシベリアで戦争犯罪人として重労働25年の有罪判決を受け、苛酷な労働に従事した。石原はもっ

とも苛酷な環境におかれて、もっとも厳しい戦争責任を担わされたと考えていたが、帰国した日本でそれを理解した人はいなかった。石原は戦後日本社会との断絶を感じた。帰国してから本当のシベリア体験がはじまったと石原は書いている。他方で、帰国した石原は日本語と再会し、堰を切ったように日本語の詩を書き始めた。石原にとって詩とは沈黙するためのことば、失語の一手手前でふみとどまろうとする意志である。ここに、「詩人石原吉郎」が誕生した、と畑谷はいう。

石原は帰国してすぐ詩を書き始めたが、シベリアの強制収容所での経験については書かなかった。石原がそれを書き始めたのは、帰国して16年後の1969年からである。それから石原は、1977年に亡くなるまで、抑留体験に関するエッセーを次々に書いた。石原のエッセーは、強制収容所という極限状況を生き延びた人によるもっとも深い人間観察として、わたしたちの前にある。

畑谷はとりわけ石原の次のような文章にひかれている。

強制収容所では、人間であろうとした者、人間の側に踏みとどまろうとした者から淘汰された。強制収容所で生き残るとは、他者を凌いで生きる、他者の死を凌いで生きる、ということである。他者の犠牲によって自分は生き残ったのである。石原は自分自身がどのようにして強制収容所の生存競争を生き延びたかは書いていないが、強制収容所を生き延びたということは加害者であったということである。「人間はつねに加害者のなかから生まれる」と石原はいう。畑谷は、「人間は、生きること自体が他者を犠牲にしている、罪を負い、傷を負いながら生きている。そういうなかで絶望の一手手前まで来て、しかし、生きていかなければいけない」という目取真のことばを引用している。

シベリア抑留という極限状況を生きたことによって獲得された石原の詩と人間認識は、畑谷の新聞連載と本書によって、いま再びわたしたちにもたらされた。わたしにとって、石原の思考は、「強制収容所こそ近代の政治のパラダイムであり、剥き出しの生を生かし、ないし殺すことが政治権力の作用である」と考えるイタリアの哲学者、ジョルジョ・アガンベン（1942-）の理論を連想させるものである。いま石原は読み直される必要がある。

第7回国際平和博物館会議に参加して

2011年5月4日～6日 会場：バルセロナ モンジュイック城

国際平和博物館会議は、3年おきに開催される平和博物館の国際会議です。前回（2008年）は日本で開催され、立命館大学国際平和ミュージアムはメイン会場となりました。

そして今年5月、スペインのバルセロナでの第7回国際会議に立命館大学から2名が参加しました。今回のテーマは、「戦争と暴力の文化から平和と非暴力の文化への変容における博物館の役割」。スペインの明るく日差しの下、家族的な雰囲気の中で進行しました。

第7回国際平和博物館会議に参加して

国際平和博物館会議の第一回から第六回までは高知市にある平和資料館「草の家」の代表として参加しました。今回は立命館大学の一研究者として参加することができて幸いでした。この国際会議はオランダのハーグに事務局ができて初めて組織され、事務局員のニケ・リスカリエット（Nike Liscaljet）さんが大活躍されました。

会場はバルセロナのモンジュイック城でしたが、その古いお城を平和博物館にするためにバルセロナ国際平和資料センターが中心になって努力がなされています。最初に平和市長会議に入っているカタルーニャ州バルセロナ県のバルセロナ市、グラノリエルス市などの市長さんから報告がありました。カタルーニャ州は、独特の言語・文化を持ち、スペイン内乱では人民戦線の拠点となった自治州です。グラノリエルスでは1938年ドイツの空襲で約200名が死亡しましたが、1979年の民主的政府ができるまで約40年間語られなかったそうです。しかし1980年代以降若者に空爆の



第7回国際平和博物館会議会場前にて
(最前列左から5人目が筆者、2列目最左が兼清学芸員)

記憶と平和の尊さを伝える記念行事を行っています。市民が傘に平和のメッセージを書くなど、創意工夫した取り組みをしているそうです。日本の平和博物館と交流をすると良いのではないかと思います。

国際会議では、平和のための博物館国際ネットワーク（International Network of Museums for Peace: INMP）に入っている博物館関係者だけでなく、今後平和博物館を創ろうとしている人々（ニューヨークやミラノなど）、芸術を通して平和の実現を目指す人々の報告がありました。今後INMPのウェブサイト国際会議の詳細が英文で載ると思います。（www.museumsforpeace.org）総会において、日本人では安齋育郎名誉館長と私が理事に選出され、早速メールで次の国際会議場について意見の交換をしているところです。

（国際関係学部准教授 山根和代）

平和博物館の様々な形

「平和と人権のための博物館を創る」セッションは、この何年かの中にリニューアル経験のある館のとりくみの紹介が行われました。「日本の平和博物館と国際平和ミュージアムの課題と展望」と題して、当館のリニューアル以降の歩みを報告しましたが、印象的だったのは国際赤十字博物館の時系列的な通史展示から全てをトピック展示に変えるリニューアル計画でした。平和博物館といえば、戦争や平和への努力を時系列的に展示するのが日本の通例ですが、世界では様々な形への挑戦が行われています。

また、今回はおそらくこの会議史上初めて、博物館としてのレベルについての問題提起もありました。「博物館における平和の文化と人権についての教育」セッションでは、博物館学の視点から平和博物館をてこ入れするため、平和博物館の国際的評価基準をつくるのが提案されました。

これまでとは違う平和博物館のあり方について、今後の議論の展開を予感させる会議でした。

（学芸員 兼清順子）



会場内の様子

開催報告 (2011年2月～6月)

第62回ミニ企画

「資料で見る京都の観光と絵葉書」

2011年2月13日(日)～3月31日(木)

現在の京都の町並みや観光都市としての姿は、20世紀初頭にはできあがっていました。往時の絵葉書からは、名勝地の華やかさから総力戦となった戦時の世相まで、様々な京都の姿を見てとることができます。今回は、立命館大学国際平和ミュージアム所蔵の絵葉書40点を通じて、明治期から昭和10年代の京都の様子を紹介すると共に、京都と戦争の関わりを考える機会になればと願い展示を行いました。

※京博連（京都市内博物館施設連絡協議会）主催
「第16回ミュージアムロード」テーマ：「おこしやす！京のほんまもん巡り」参加企画



「資料で見る京都の観光と絵葉書」展示資料

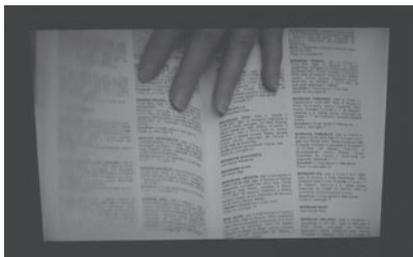
第63回ミニ企画

「ジャック・サル展— De/Portees 強制収容—」

2011年4月15日(金)～5月4日(水)

第二次世界大戦下、イタリアからナチスの収容所へ送られた人の数は約44,000人といわれます。本展は、風化しつつあるイタリアでの人種迫害について想起し、歴史的反省を促すことを意図して開催されました。

現代アートの作家、ジャック・サル氏による展示は、映像を用いたインスタレーションという立命館大学国際平和ミュージアム初の試み。展示室では、イタリアに40以上あったといわれる強制収容所のリストが映し出されるスクリーン映像や、収容所へ送られた人々の名前を載せた本の映像が流され、併せてアウシュヴィッツから生還したプリーモ・レーヴィ（イタリアの化学者・作家）の言葉を、ジャック氏自ら日本語で書き記した作品も展示されました。



「ジャック・サル展— De/Portees 強制収容—」展示作品

今号では2011年2月から6月の間に

開催しました企画展示をご紹介します。

第64回ミニ企画

「フィリピンスタディーツアー報告展」

2011年5月7日(土)～6月5日(日)

AKAY Youth Japan（アカイ ユース ジャパン）は立命館大学の学生や卒業生を中心とした、フィリピンと日本の未来を考えるNGO団体です。チャリティイベントの開催やフェアトレード商品の販売を通じて、フィリピンの貧困地区にある幼稚園「AKCDF」を支援し、毎年夏には現地を訪問するスタディーツアーを実施しています。

AKAY Youth Japanのメンバーが2010年にフィリピンを訪れ、実際に目にした様々な問題を、より多くの人に伝えたいと企画した今回の報告展。ストリートチルドレンやゴミ山で暮らす人々など厳しい現実が写真やパネルで紹介され、特に日本のODAとフィリピンの貧困が結びついているという報告については、来館者から「はじめて知った」という驚きの声をいただきました。



「フィリピンスタディーツアー報告展」展示室風景

第65回ミニ企画

「Non-profit Activity WORLD CHILDREN PHOTO PROJECT 写真展 地球が教室 平和にピント！世界の教え子」

2011年6月10日(金)～6月30日(木)

非営利活動 ワールドチルドレン フォトプロジェクト（WCPP）は、世界各地の紛争地や被災地の子供たちに使い切りカメラを渡して、「平和」をテーマに写真を撮影してもらうワークショップを開催しています。

本展では、イスラエルやベトナムなど各国の子供たちが撮影した写真85点と共に、東日本大震災で被災した子供たちの作品6点を展示しました。6月10日(金)～12日(日)には、WCPP代表の庄司博彦氏によるギャラリートーク形式の講演会が行われ、世界各国で様々な境遇にある子供たちと直に交流し、一緒に平和とは何かを見つめてきた庄司氏だからこそのお話に、参加者は熱心に聞き入っていました。



「写真展 地球が教室 平和にピント！世界の教え子」展示作品

世界187の顔

いのち —生命の現場から—

会 期：2011年5月17日(火)～7月10日(日)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール
参 観 者：7,909名
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
企画協力：日本ビジュアル・ジャーナリスト協会 (JVJA)
後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
京都市内博物館施設連絡協議会、NHK 京都放送局
KBS 京都、朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社
読売新聞大阪本社



展示会場入口



展示会場の様子



公開記念講演会

「世界187の顔」の取材からみえてきたもの

日 時：2011年5月24日(火) 14:40～16:10
会 場：立命館大学 衣笠キャンパス 明学館94号
講 師：山本宗補氏 (JVJA 会員 / 「fotgazet」 創刊号編集長)
司 会：池尾靖志氏 (立命館大学講師)
聴 講 者：218名



講演会場の様子



講師：山本宗補氏 (右)、司会：池尾靖志氏 (左)

2011年5月17日(火)から7月10日(日)の約2ヶ月に渡り、2011年度春季特別展「世界187の顔—いのちの現場から—」を開催しました。これは、日本ビジュアル・ジャーナリスト協会 (JVJA) 会員たちが紛争や環境破壊、貧困、自然災害など、生命の危機にさらされている世界各地の様々な現場を取材し、伝えるために制作された約130枚の写真パネルで構成されています。

学校に行くことができず路上で物売りをする子どもたち、津波の被害で家だけでなく家族を失った女性、2時間かけて家まで水を運ぶ少女…パネルに映る「顔」は、笑顔だけではなく、平和とは何か考えさせられる作品にあふれていました。

立命館大学国際平和ミュージアムでは、ミュージアムのスローガンである「みて・かんじて・かんがえて・その一步をふみだそう」のもと、これらの様々な「顔」の展示を通して、現在世界のどこかでおきている状況を伝え、来館者にいま一度平和を見つめ、平和とは何かを考えるきっかけになることを願い特別展として開催しました。

パネルの中には、2004年12月26日のスマトラ島沖地震で発生したインド洋大津波、2008年5月12日に発生した四川大地震の被害を伝えるパネルも含まれており、3月11日(金)の東日本大震災の被災地について、新聞・テレビ等から流される光景と比べながら見学される方も多かったようです。

5月24日（火）には、衣笠キャンパスにて、記念講演会が開催されました。講師にJVJA 会員・オンラインマガジン「fotgazet」創刊号編集長である山本宗補氏をお招きしました。

立命館大学講師の池尾靖志先生の司会のもと、「fotgazet」緊急号外「東日本大震災 大津波の現場から」ならびに国際平和ミュージアム特別企画 写真展「東日本大震災の現場から」の写真を中心に、被災地の現状が語られました。特に原発の問

題については、3月末に福島第1原発から半径20~30km 圏内に入った際の町の様子や、自身が測定した放射線量などについて解説いただき、直に現場を目にした山本氏だからその内容に、参加者は真剣な面持ちで耳を傾けていました。「世界187の顔」は、日本と遠くはなれた場所でしか起こらない出来事を伝えるためだけのパネルではないということを感じ取っていただけではないでしょう。

特別展見学者の感想より

●解説や説明を少なくし、顔（目）と顔（目）の対面で、感じられるようにしていたのがよかったです。最後の方では、笑顔で、希望を示してくれていたのがホッとしました。

（大阪府 教育関係者 60代 男性）

●顔ににじみ出るその人達の気持ちが伝わってきそうだった。カメラを見つめる人達のカメラの先に見えるものを心苦しく感じた。

（兵庫県 大学生 10代 男性）

●世界に苦しい環境に置かれている人はまだまだたくさんいました。この展示を見て改めて感じました。恵まれている私たちは今を大切にその有難さと感謝の気持ちをもって、頑張らないといけません。

（滋賀県 会社員 30代 女性）

●世界中の様々な顔が沢山並んでいて本当に印象深かった。貧困が生むのであろうさまざまな表情や、戦争によって傷つけられた人々の表情は痛々しく心にささった。自分が背けてきた現実に向き合えた気がした。ぜひ、周りの人たちにも見に

行くようすすめようと思う。考えさせられた良い展覧会だった。

（京都市 大学生 10代 女性）

●今の世界の中で生きている人々が生命をおびやかされたり、希望を失いそうになりながらも、「生きよう」としている姿が、胸を打ちました。また、現地に行き、さまざま人々の写真を撮影した写真家の姿にも、敬意を表したいと思います。

（京都市 60代 男性）

●非常に素晴らしい作品ばかりでした。普段マスコミでは目にすることができないものが多く世界の状況が感じられました。色々な表現が使われていて、その場面が切り取られているので臨場感が有ります。沖縄の集団自決などのテーマは、今、残しておかなければ、歴史がねじまげられる恐れもあるので、重要な取り組みだと思います。それぞれの顔から世界の姿が浮き彫りになる良い展示でした。貧困をなくし、平和を守るため何ができるのか、考えるきっかけになりました。

（京都府 会社員 50代 男性）

公開記念講演会の感想より

●マスコミでは知りえない事実を聞くことができ貴重だった。京都では実感としてなかなか考えられない現地の話を自分の目で見てきた人が自分の声で話すことによって震災への関心をきらせないために大事な機会だった。

（男性 20代 大学生）

●今までテレビ・新聞のメディアでしか得られなかった震災・原発の事実を知り、私達一人一人が自分の意志で真実を得る意識を持たなければならないと感じた。本日の講演で震災について考える時間を持つことが出来、今からでも出来ることについて真剣に考えて取りくんでいきたい。

（女性 20代 本学学生）

●確かにTV や新聞による情報だけを鵜呑みにすることは危険なことだと思うし、自らが地震の被害にみまわれた現地に足を運び体感することは大切であると思う。また、復興支援に赴くことは重要であると思うが、地震だけではなく放射能の被害が出ていることからすると、現地へ行くこと自体も今では難しいのではと感じた。それでも実際に行くべきなのか否か、また、地方にいながらも私たちにできることがあるのではないかと考えた。

（女性 20代 本学学生）

●たくさんの写真と、原発に関するこれまでどのメディアも教えてくれなかった情報、震災から2か月が経過しこの異常な状況にある意味「慣れ」てしまっている自分に気づかされました。

（女性 20代 本学学生）

特別企画

写真展 東日本大震災の現場から 同時開催 安齋育郎名誉館長、福島原発被災地に行く

会 期：第1弾 2011年5月17日(火)～6月19日(日)
第2弾 2011年6月21日(火)～7月30日(土)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1階ロビー
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
企画協力：日本ビジュアル・ジャーナリスト協会 (JVJA)
安齋科学・平和事務所

緊急特別講演会

「福島原発事故による放射能災害と私たちの生活」

日 時：2011年3月23日(水) 13:00～14:30
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1階 中野記念ホール
講 師：安齋育郎 (立命館大学国際関係学部教授/国際平和ミュージアム名誉館長)
聴 講 者：250名



特別講演会

「福島原発から何を学ぶか? 一二度の現地調査をふまえて」

日 時：2011年6月29日(水) 16:45～18:00
会 場：立命館大学 衣笠キャンパス 明学館96号
講 師：安齋育郎 (立命館大学名誉教授 / 国際平和ミュージアム名誉館長 / 安齋科学・平和事務所所長)
聴 講 者：203名



展示会場の様子



展示会場の様子



講演会の様子

2011年5月17日(火)から7月30日(土)の約2ヶ月半に渡り、緊急特別企画として「東日本大震災の現場から」を開催しました。

2011年3月11日(金)に起こった東日本大震災には、未曾有の自然災害という面と、未曾有の原発事故という二つの側面をもっています。多くの尊い命を一瞬のうちに奪った震災発生から数ヶ月が経過した現在でも、多くの方々が不安な避難生活を余儀なくされています。

国際平和ミュージアムでは、震災発生直後より、「生命の現場」である被災地から震災の事実を伝え、離れた地に暮らす人々の被災地への思いを呼び起こし、復興へのきっかけの場とすることが、ミュージアムの役割であると考え、その手段を模索していたところ、5月17日(火)から7月10日(日)までの開催が決定していた春季特別展「世界187の顔—生命の現場から—」の企画協力団体である日本ビジュアル・ジャーナリスト協会 (JVJA) のメンバーが、3月11日(金)の震災発生直後から精力的に被災地の取材をされていたことを知り、急遽協力をいただき、今展の開催が実現したものでした。展示は2回に分け計

44点の作品を展示しました。

第1弾展示では、震災直後の被災地や被災された人々に焦点が当てられ、多くの方にご覧いただきました。第2弾展示では、震災発生から数ヶ月が経過した現地の様子を中心に展示しました。

また、パネル展示「安齋育郎名誉館長、福島原発被災地に行く」も同時開催し、安齋名誉館長が原発事故の影響下にある福島県を実際に訪れ、現地の調査をすると共に人々の要請に応え講演を行った様子を、安齋名誉館長が撮影した写真も交えてパネル展示で紹介し好評を得ました。

今展の関連企画として、6月29日(水)には安齋名誉館長による特別講演「福島原発から何を学ぶか? 一二度の現地調査をふまえて」を開催し、4月、5月の二度の現地調査のこともふまえて、私たちが未来に向かってどうするべきなのかを考えるものとして、多くの学生・市民の方にお越しいただきました。ミュージアムでは引き続き今回の被災地の情報を伝えていくために取り組んでいきたいと考えています。

「生き方探究・チャレンジ体験」 京都市立上京中学校2年生2名を受け入れ

2011年6月7日(火)から10日(金)の4日間、京都市教育委員会の主催による「生き方探究・チャレンジ体験」推進事業の一環として、京都市立上京中学校2年生の女子生徒2名の方を受け入れ、職業体験を実施しました。

職業体験の一日は、朝礼から始まります。一日のスケジュールを確認後、初日は高杉館長の講和を聴き、ミニ企画展示撤収の手伝い、学内向け広報として三角柱の組立と生協食堂への設置、近隣へチラシのポスティングを学生スタッフと一緒に体験。二日目からは、開館準備をして受付業務を担当。最初は緊張していた中学生達も、大きな声で笑顔でお客様に挨拶出来るようになりました。三日目、四日目には、メディア資料室で返却図書のパ架等やミュージアムボランティアガイドによる小中学校団体向けの展示解説に同行し一緒に見学をしました。また、学校で放送委員の中島さんは、小・中学生の団体見学者に対して出迎えの挨拶をしました。文化委員でイラスト

が得意な大喜多さんは中学生向けのミュージアム案内チラシを作成するなど、特技を活かした業務にも取り組みました。

この四日間、「仕事をやる」とはどういうことなのか、「お客様を迎える」側に立って博物館の様々な仕事の体験を通して学びました。また、国際平和ミュージアムとの出会いが、「戦争がなければ平和なのか?」「平和とは何か?」についても学びきっかけとなったのではないのでしょうか。今後も是非深めて考えてほしいと願っています。



京都市立上京中学校の皆さん

NGO ワークショップ開催

開催日時：2011年7月16日(土)13：30～15：30
 講師：PEACE BOAT (ピースボート)
 国際部 中沢聖史氏
 場所：立命館大学国際平和ミュージアム2階
 ミュージアム会議室
 対象：大学生、大学院生
 参加者：12名
 主催：立命館大学国際平和ミュージアム
 企画：国際平和ミュージアム
 学生ミュージアムスタッフ
 王屹(先端総合学術研究科・D1回生)
 森悠美(文学部・4回生)
 金子夏生(国際関係学部・2回生)
 笹川留美(法学部・2回生)
 日下部友馬(産業社会学部・3回生)

今年度のNGOワークショップは、立命館大学国際平和ミュージアムの学生ミュージアムスタッフが主体的に企画・実施することになりました。

ミュージアムの常設展示室「平和をもとめて」第2展示室に展示してある12のNGO団体の活動から興味・関心のある団体について意見交換をする中で、依頼する団体を決定しました。リーダー役の王さんを中心に電話やメール、ファックスを使って講師依頼からワークショップ内容などの打ち合わせを進めると同時に、ワークショップ広報に必要なチラシの作成などに取りかかりました。開催日までの限られた時間の中で、いかに効率よく広報に取り組むかも課題の一つでした。学生ミュージアムスタッフとしての主な活動内容は、ミュージアムの見学者に「戦

争がなければ平和でしょうか?」を切り口に世界の様々な「平和でない」状況を伝え、改めて平和とは何か?平和な世界の実現のために、自分には何ができるだろうか?と考えるきっかけになるよう展示解説することです。今回のワークショップのようにチームで活動することは初めてのことでした。

学生ミュージアムスタッフとしての活動経験が2年以上ある学生が、今年から活動を始めたスタッフをうまくリードし、無事ワークショップ開催日を迎えました。今回はピースボートより中沢聖史氏を講師に迎え、ピースボートの活動紹介に続いて、平和教育プログラムの紹介をいただいた後、2つのグループにわかれて「貧困をなくす方法を考える」ワークショップを行いました。「価値観を押しつけない」ピースボートの姿勢や活動に興味を持った参加者もいたようです。今回のワークショップが参加者にとって貧困をなくす行動をおこすきっかけになればと思います。

秋にも引き続きNGO団体を招いたワークショップを開催します。今から楽しみなところです。



ワークショップの様子



講師の中沢氏(中央右)、インターン水野さん(中央左)を囲むスタッフ

「へいわ」ってなに??2011

日 時：2011年7月22日（金）13：30～15：00
 7月30日（土）10：00～11：30
 会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 2階
 ミュージアム会議室
 対 象：小学生以上、保護者
 参 加 者：7月22日（金）20名
 7月30日（土）19名 両日計 39名

プログラム：90分
 ・挨拶（高杉巴彦館長）
 ・安齋育郎名誉館長による平和のお話
 ・京エコロジーセンターの遠藤さん・新堀さんと一緒に、節電や環境問題について考えよう。（7/22）
 ・ミュージアム「さいころくん」を使って、大学生のお兄さん・お姉さんと一緒に平和について考えよう。（7/30）
 ・まとめ・平和へのメッセージ
 ・参加証授与

今年で6回目となるミュージアム恒例の夏休み親子企画。今年は2年ぶりに「へいわってなに??」をタイトルに、平和についてと同時に、今もっとも注目されている節電や発電について学習しました。

まず最初に高杉館長から、東日本大震災の惨状も踏まえて、人が自分らしく生きられない状況は平和ではないという挨拶をいただきました。

続いて安齋名誉館長のお話では、先生お得意の手品やクイズも交えて、ユーモアたっぷりに先生が子どもだったころの戦時中の日本の様子や、今なお恵まれない地に生きる子どもたちの状況をお話いただき、みんなで平和な世界を作っていくことの大切さを説かれました。

次に、22日はスライドを使って日常生活からいかに二酸化炭素が排出されているかを学習したうえで、うちわ

や手回し発電機を使った実験で電気を作りだすことがどのくらい大変なのかを体験し、節電の大切さについて理解を深めました。また30日は、ミュージアムの展示物から今と昔の暮らしを比較して、現在の生活はいかに電気を使っているのか、一人ひとりが節電のためにできることは何なのかを学生ミュージアムスタッフと考えました。

そして最後に、この企画に参加した子どもたちには平和や自分たちの暮らしについて学んだことを証する夏休み親子企画の参加証が授与されました。

子どもたちから寄せられた平和へのメッセージ

- ◎発電は、人の手でやるととても大変なことがわかりました。私は無駄な電気をこまめに消すようにしたいです。
- ◎食べ物がないで死んでいく人がいるのに、スーパーやコンビニの販売の売れ残りが300万人分も捨てられているのはもったいないと思いました。
- ◎私は今日はじめて平和を考えました。平和というのは日本が豊かだけでなく、世界が平和なことです。

参加した保護者の方々から感想

- ◎「へいわ」について、普段は深く考えていないことをじっくり考える機会ができてよかったです。子どもたちにも「へいわ」を色々な面から考えることができる力が少しずつつくれば、と思っております。



平和のお話の様子



講座の様子

『カティンの森』DVD 上映とレクチャー

〈DVD 上映〉

開 催 日：2011年5月29日（日）
 作 品：『カティンの森』〔2007年 / ポーランド / 123分〕
 時 間：①10時～ ②13時～
 場 所：立命館大学国際平和ミュージアム 2階
 ミュージアム会議室

参 観 者：37名
 主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
 企画協力：立命館大学職員共同研修
 「平和研究」プロジェクト

〈レクチャー〉

時 間：15：15～16：15
 講 師：ラドスワフ・ティシュキェヴィッチ氏
 （駐日ポーランド共和国大使館一等書記官）
 コーディネーター：君島東彦（国際関係学部教授）
 参 加 者：34人

2011年度は、立命館大学国際平和ミュージアムに関わるボランティアガイド、学生ミュージアムスタッフを中心に、学習会を兼ねた企画とし開催しました。ポーランド大使館の協力を得て、『カティンの森』DVD 上映と駐日ポーランド共和国大使館一等書記官ラドスワフ・ティシュキェヴィッチ氏のレクチャーとを行いました。

当日は朝から京都府南部に大雨洪水警報が発令され、午後のは、20人ものキャンセルが相次ぎました。それでも雨の中遠方から参加した方もおり、君島教授のコーディネートのもと、質疑応答が活発に行われました。講師には時間を延長し対応頂き、大変有意義な時間を過ごすことができました。今まで知る機会が少なかったポーランドにおける「カティンの森」事件の歴史の事実、講師の実体験に基づく1990年代以降のポーランド情勢についてお話頂きました。平和の今日的課題を考える貴重な機会となりました。



会場の様子



講師のティシュキェヴィッチ氏

小中学校教員対象下見見学会2011

開催日時：2011年7月27日(水)
2011年8月18日(木)、19日(金)、23日(火)、24日(水)
13:00～15:00

所要時間：120分

内容：挨拶 高杉巴彦館長(5分)

平和講義体験 安齋育郎名誉館長(30分) 質疑応答(10分)

展示見学(45分)

ボランティアガイド、学生ミュージアムスタッフによる解説あり

収蔵品(モノ資料)の紹介、教育教材としての利活用(15分)

教材として使える資料をガラスケース展示、学芸員の解説あり

見学受付・各種サービスのご案内、個別相談会(15分)

平和講義やガイドブックの事前送付等、各種サービスのご案内



学芸員による展示解説の様子

昨年度に引き続き、小中学校の先生方を対象に下見見学会を企画・実施いたしました。ミュージアムでは、戦争と平和の歴史を知り、平和創造のあり様を学校教育に携わる先生方とともに考え、ミュージアム見学につながる機会を持ちたいとの思いから、2007年度より見学会を実施しています。

当ミュージアムの見学団体の多くは、修学旅行、遠足、校外学習、地域探検等、小中学校の児童・生徒による見学となっています。見学をより充実したものにしていただくため、ミュージアムについて知っていただき、教育現場での利活用を考えていただけるよう、昨年と同様に当日の参加受付可、参加費は無料、夏休み中複数日の開催日程の設定など、先生方が公務でも個人でも気軽に参加できるような設定をしました。

ご参加いただいた先生方からは、内容の充実に対するご好評と、また改めてじっくり見学をしたいという声を数多くいただきました。アンケートに寄せられたご意見は、引き続き、次回開催に活かしていきたいと考えています。

アンケートより一部抜粋

- 5～6年生の平和学習の一環として、まとめ学習の参考にしたい。(小学校)
- 内容がよくわかり充実していました。(中学校)
- 実際に安齋先生の講演や簡単な下見見学をさせて頂いてよかったです。(中学校)

日独交流150周年 第5回国際平和・人権連続セミナー ～平和の諸相を見る～

『国際平和構築と化学兵器禁止条約』

日時：2011年5月10日(火) 13:00～14:30
会場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス ラルカディア103教室
講師：アレクサンダー・オルブリッヒ博士
(大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館総領事)
司会：出口雅久(法学部教授、平和教育・研究セクター長)
コーディネーター：ロルフ・ディーター・シュルンツェ(経営学部教授)
共催：大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館
参加人数：52名

本ミュージアムでは、2009年度より、国際平和人権連続セミナーと題して、世界各国から知識人を招き、世界的な視野に立ち、平和を見つめる為の講演会を行っています。

第5回目となる今回は、初めてBKCを会場として大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館総領事のアレクサンダー・オルブリッヒ博士をお迎えし、これまで化学兵器禁止機関(OPCW)大使や、化学兵器禁止条約(CWC)ドイツ国内当局局長を歴任されたご自身の経験から、「国際平和構築と化学兵器禁止条約」をテーマに講演いただきました。

講演終了後の質疑応答では、なぜ平和に携わる仕事に



講演の様子



会場の様子

ついたのか、との聴講者からの質問に「ドイツは今まで嫌というほど戦争を経験してきた。もう平和を追求していかなければならないと思った。」とオルブリッヒ氏が返答する場面もありました。

聴講者の感想より

- 日常触れることのない内容だったので、話が聞けて良かった。(京都市 大学生 20代 女性)
- 英語が少し難しく専門的な内容でしたが、平和について考えさせられる内容で有意義でした。(京都市 大学生 20代 男性)

日本平和博物館会議加盟館の紹介

日本平和博物館会議では、平和博物館の活動を広く知っていただけるように、今年の2月にロゴ・マークを決定しました。それぞれの館の活動を誌上で紹介していきます。

第1回は、大阪城公園の一角にある「ピースおおさか」を紹介します。



日本平和博物館会議
ASSOCIATION OF JAPANESE MUSEUMS FOR PEACE

日本平和博物館会議（ロゴマーク）

第1回 ピースおおさか（大阪国際平和センター）

ピースおおさか ～“平和の首都”大阪のシンボルとして

ピースおおさか
専門職員 常本 一

はじめに

ピースおおさか（大阪国際平和センター）は、大阪における戦争被害者を追悼するとともに、「加害」と「被害」の両面から戦争の実相を明らかにし、平和の意義を次代に伝えようとする博物館施設である。

ここでは、ピースおおさかの設立経緯と展示内容を説明した上で、最近のピースおおさかを取り巻く状況と、そのなかでの取り組みを紹介したい。

ピースおおさかの設立経緯

明治の初年、ピースおおさかのある大阪城公園とその周辺には、兵部省の役所や陸軍士官学校の前身の兵学寮、軍事病院など多くの施設が設けられた。

昭和20（1945）年8月15日にいたるアジア・太平洋戦争において、日本は戦場となった中国をはじめアジア・太平洋地域の人々、また植民地下の朝鮮・台湾の人々に多大な危害を与えた。

一方戦争末期には、大阪は50回をこえる空襲を受けて廃墟と化した。こうした被害は大阪にとどまらず、世界最初の核の被爆都市広島・長崎、「本土決戦」の犠牲となった沖縄をはじめとして、数多くの日本国民が生命を失い、傷つき、病に倒れた。

終戦30周年を控えた昭和49（1974）年、大阪府議会で記念事業を要望する質疑が行われたのをきっかけとして、民間団体の要望が相次ぎ、昭和56（1981）年、大阪府社会福祉会館に大阪府平和祈念戦争資料室が開設された。

そして資料室はピースおおさかへ発展的に解消されるとともに、運営は財団法人大阪国際平和センターに託されて、平成3（1991）年9月17日に開館した。

ピースおおさかの展示内容

展示室Aは「大阪空襲と人々の生活」を主題とし、大阪空襲の実相を展示している。50回以上に及ぶ大阪空襲の実態を明らかにするとともに、戦時下の生活の具体的な再現を通して、国内における戦争の悲惨さを実感できるよう、1トン爆弾や焼夷弾の原寸大の模型、映像で見る大阪大空襲の記録等を展示している。

展示室Bは「15年戦争」を主題とし、いわゆる加害の実相を展示している。満州事変から第二次世界大戦終結まであしかけ15年にわたるアジア・太平洋地域を中心とした戦争の実相を示すとともに、広島・長崎に投下された原爆の恐ろしさや、アウシュビッツに

見られる戦争の非人間性なども取り上げている。

展示室Cは「平和の希求」を主題とし、第二次世界大戦後の戦争と平和をめぐる動きを展示している。また、特別展示室では、これまで戦争と平和をめぐる様々な展示をおこない、講堂では、「定時映画」や「ウィークエンドシネマ」の上映を行っている。

中庭（パティオ）は「刻の庭」（ときのにわ）である。大阪空襲で亡くなられた方々の追悼と平和を祈念する場として、平成17（2005）年8月、オープンした。

最近のピースおおさか

2008年、橋下徹氏が知事に当選して以降、大阪府は緊縮財政を実行し、その煽りを受け、大阪府・大阪市からの出資で運営しているピースおおさかは存続の危機を迎えることになった。

2008年度に大阪府が策定した「財政再建プログラム（案）」で事業の必要性は高いと判断され、存続は決定したが、運営費が大幅に削減され、特別展及び企画事業への補助は中止とされた。こうしたなかではあるが、特別展等の企画事業の取り組みはボランティアのご協力で一層充実したものとなっている。

そのひとつは、2011年3月の『写真で見る 大阪空襲』写真集の完成である。ボランティアグループである大阪空襲写真集編集委員会が調査編集し、ピースおおさかが発行した。詳細に検討を経た大阪空襲写真集の刊行は初めてである。

もうひとつは、理事であるもず唱平氏の尽力により、東日本大震災の復興支援事業として企画された「平和の歌声 カラオケ道場」である。平和の概念は、戦争が無い状態だけではなく、日々の平和な暮らしを阻害する環境破壊や飢餓などが無い状態であると考えるとき、今回の大震災が引き起こした現実には平和博物館として看過できるものではない。

具体的には、関西ゆかりの作詞家や作曲家（荒木とよひさ・もず唱平・岡千秋・三山敏）が合同で東日本大震災復興支援の応援歌「がんばれ援歌」を制作（歌・高橋樺子）。

この音楽著作権料を全額ピースおおさかに譲渡、ピースおおさかは、これを東日本大震災復興支援に当てることを決定した。皆さんが、CDを買ったり、カラオケで歌ったりと、ご協力をお願いしたい。



ピースおおさか外観（所在地：大阪市中央区）

各国の来館者をガイドして

立命館大学国際平和ミュージアム

ボランティアガイド・平和友の会 谷川佳子

ここ立命館大学国際平和ミュージアムにはいろいろな見学者が来られます。金閣寺、龍安寺といった京都観光では外せないスポットが近くにあるために、外国人の来館者の方も多くおられます。館の英語名は“Kyoto Museum for World Peace Ritsumeikan University”で、訳せば「立命館大学 世界平和を希求する京都博物館」となるのでしょうか。平和に関心のある人なら、ちょっと気になる、入ってみたいくなる名称のミュージアムですね。

さて、私は常日頃日本人の来館者を主にガイドしていますが、ときおり、外国からの団体や個人の見学者をガイドすることがあります。また、たまたま質問をされて、お答えをすることもあります。日本兵が中国で勝利の万歳をしている写真を見て、ギブアップして降参していると思った、というアメリカ人もいましたし、やはりイヤホンガイドだけでなく、対面ガイドは必要だなあ、と思います。

ガイドは展示内容に沿って、ストーリー化して見学者の理解を助けます。しかし特に外国人見学者の場合、見学者の母国では当時どんな状態だったのかという、こちらにとって未知のストーリーを話してきかせてもらう役得もあります。戦争体験は国内でも個人によって千差万別ですが、外国の戦争体験はまたこちらが驚くことも沢山あります。互いに「信じられない…」と感じつつも、それを「善悪」「好悪」「正誤」と裁くのではなく、まずは違いを受け止めていく、逆に共通点に感心、納得する…ガイドとは、伝えるだけでなく聞き取り学ぶことでもあると実感します。

ここではこの数年間に体験した内外の見学者との印象的なエピソードをいくつかご紹介してみようと思います。外国人との対話に使われた言語は英語です。

日本も含めたアジアの大学生が混ざっているグループでした。十五年戦争のコーナーで説明し、アジア、とくに中国での日本軍の侵略行為、虐待行為があったことを話したら、韓国、タイ、中国の学生は全部学校の歴史で習ったと言っていました。その中の日本人学生も歴史で学んだと言っていました。なんだか日本の歴史をくわしく知っている日本人の成人をガイドしているような感じでした。日本が加害した国の見学者にガイドするときは正直言っているつも緊張します。中国人の男子学生は感情的でなくここに日本の蛮行が展示

されていることを評価していました。ところがその団体の後、別の日本人の大学生をガイドしたら、日本の現代史、日本軍の加害の歴史を全然習っていないといい、それは理科系なので高校で日本史を選択しなかったためだと話してくれました。そういう我が国の教育システムの中ではいわゆる一流大学と言われる大学を卒業しても、アジア諸国の同世代の若者より日本の過去を知らない成人が生まれ出されるのだと確認した瞬間でした。その男子学生を責めることはできません。彼がここを訪れてくれてよかったと感じました。

また、国家総動員のコーナーで対話した戦争を体験されたイギリス人女性は、お寺の鐘を供出している写真を見て、イギリスでは鉄道線路がはがされ軍事工場に運ばれた、また、女性が竹やり訓練をしている写真や女学生の勤労働員の所で、女性が男性と同等に協力をした例として、エリザベス女王が救急車のドライバーをやって国民の戦意を高揚した、という話をしてくれました。同じ戦時中、神として君臨した大日本帝国天皇と救急車を自ら運転した大英帝国女王。初めて知ることでした。この女性は、息子さん夫妻とお孫さん（赤ちゃんもいました）とでゆっくり見学してくれ、若い親子も笑顔で勉強になったと帰って行かれました。

また、ドイツ系オーストラリア人女性は、徴兵検査で甲乙丙丁と選別され、差別される兵の展示の所で、お父様のおばさんに当たる方がハンディキャップを持っておられたがために、ドイツ人でありながらもひどい虐待を受けた、というとてもリアルなナチス時代の話をしてくれました。お父様はヒトラーユーゲントに入っていたナチズム信奉者で戦後はオーストラリアに移住したとのことでした。私の父は志願将校だったので互に加害者二世として平和を語り継ぐことの責任を共有しました。

他国の文化は多くは人伝えで知るのですが、どんな形であれ直に出会い、互いの体験を交流することで「好悪」「同異」「誤解」を超えて理解しあい、友情をはぐくむことができるのだと思います。立命館大学国際平和ミュージアムはそういう出会いを紡ぐ場所であり、まさに世界平和を希求できる場です。今は稀ですが、こういったチャンスがもっと多くなるといいと思っています。

常設展示見学者の感想 (2011年2月～7月)

戦争のことがくわしくわかり、戦争のことをもっと知りたくなった。

男性 小学生 三重県

とても悲しくなるような内容だったけど、これはずっと残してほしいと思った。写真がすごくリアルだった。

女性 中学生 奈良県

戦争についての知識を、私たちは教科書で見る程度のことしか知りません。でも、このような場所に来ることで多くのことを学べてとても良かったと思いました。私は戦争のない世界が来ることを望んでいます。

女性 高校生 愛知県

高校生の時にきたのが1度目だったので、改めて、今回見ると感じるものも違った。今、保育士として、日々子どもと関わる中で、平和があってこそ、子どもたちが健やかに成長発達できるんだなと感じる。人間が人間らしく生きる根元はやはり平和だと思うので、今日様々知ったこと、感じたことを、周りにいる知人、そして子どもたちにも伝えていけたらと感じた。

男性 20代 大阪府

特に2階のサイコロの形をした展示物は良かったと思います。実際に手にとれてとても分かりやすかったです。

男性 中学生 奈良県

胸が痛くなりました。自分の知らない時代があって、今の自分がいるんだと実感しました。戦争に勝ってれば。あの時でやめていれば。そういう考えは少し違う気がしました。ありがとうございました。

女性 大学生 京都府

一つ一つのことをとてもわかりやすく、ためになった。日本にもこんなにつらいことがあるなんて考えもしなかった。考えるためのいい機会になった。今、日本は原発で問題になっているので、このようなことにならないようにしてほしい。

男性 中学生 滋賀県

今の状況は昔より十分平和になったと思うが、世界ではまだ戦争が起こっているかもしれない。これ以上悲しみ、苦しみが増えないようにしてほしい。逆にうれしさや平和を増やしてほしいと思った。今日の見学を通して今の生活がどれ程幸せか分かった。この見学を忘れずにこれからすごしていきたい。

男性 中学生 京都府

加害、被害、当時の反戦運動、これからの課題等、分類がキッチリされていて、わかりやすかった。

男性 60代 大阪府

映像がリアルで実写があったのでわかりやすかったです。興味がわきました。

男性 中学生 滋賀県

今回は、ボランティアの方のわかり易いご説明がありとても深く理解できました。見るポイントがよくわかりました。ありがとうございます。

男性 60代 大阪府

今までの資料では書いてあったり置いてあったりしていないものがいくつもあり、とても勉強になったし、よかった。少しリアルすぎてびっくりした。

女性 中学生 埼玉県

ベトナム戦争について、初めてくわしく学んだ。子どもたちにもぜひ知ってほしいと思い、今日はつれてきました。来てよかったです。またぜひゆっくり来館したいです。

女性 40代 奈良県

戦争のおそろしさを知ってほしいという気持ちがつたわってきた。これからも、人々に平和の大切さをつたえてください。

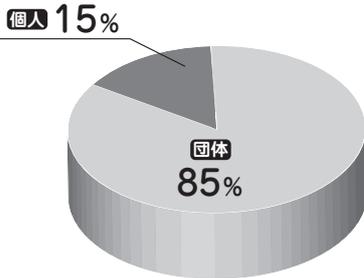
男性 中学生 奈良県

2010年4月
～2011年3月
入館者状況

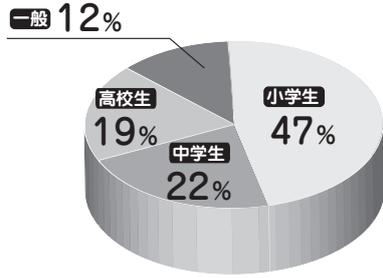
◎開館日数 294日

◎オープン後常設展入館者数累計 749,079名

<有料団体・個人入館者状況>



<有料団体入館者数状況>



2010年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	人数計(名)
総入館者数		3,630	3,677	5,868	2,877	3,007	2,188	12,013	9,527	4,562	1,247	2,043	2,306	52,945
特別展	夏季特別展 『カレル・チャペックの世界』												(6/15～7/31)	4,336
	秋季特別展 『世界報道写真展2010—WORLD PRESS PHOTO 2010—』												合計(3会場)	12,882
特別展	京都 (立命館大学衣笠キャンパス)												(9/22～10/16)	7,974
	大分 (立命館アジア太平洋大学)												(10/19～11/7)	2,329
	滋賀 (立命館びわこ・くさつキャンパス)												(11/10～11/23)	2,579
	冬季特別展 『ピース☆コレクション—資料でつづる平和ミュージアムの軌跡—』												(10/26～12/18)	15,478
	小計													
講演会 ほか	第2回国際平和・人権連続セミナー (衣笠キャンパス 創思館カンファレンスルーム)												(4/22)	141
	フォルカー・シュタンツェル氏 (駐日ドイツ大使) 『ドイツにおける紛争解決と平和構築』												(5/29)	600
	第3回国際平和・人権連続セミナー (衣笠キャンパス 明学館94号教室)												(5/29～6/12)	626
	伊波洋一氏 『宜野湾市長として、米軍再編と私たちの暮らしを振り返る』												(6/13)	37
	パネル展『平和・文化・スポーツ創造に翔ばたく立命館人』(国際平和ミュージアム 中野記念ホール)												(6/16)	140
	戦没画学生「戦場からの絵葉書」展 (国際平和ミュージアム 2階会議室)												(7/3)	42
	対談 窪島誠一郎氏 (無言館館主) × 高杉巴彦館長 『戦場からの絵葉書によせて』												(7/22)	415
	第4回国際平和・人権連続セミナー (衣笠キャンパス 研心館632号教室)												(7/22)	70
	ラン・ツウィゲンバーク氏 (国際交流基金研究者) 『記憶と戦争：イスラエルと日本における戦後史比較』												(6日間・7/28～7/30、8/18～8/20)	117
	カレル・チャペックの世界 (国際平和ミュージアム 1階ロビー)												(10/5)	215
	公開記念講演会 川村貞夫教授 (立命館大学理工学部ロボティクス学科) 『ロボットの科学と技術』												(11/16)	252
	夏休み親子特別企画2010『ロボットの美演・出前授業』(国際平和ミュージアム 1階ロビー)												(10/15)	90
	マンドリン ミニコンサート (国際平和ミュージアム 1階ロビー)												(11/20)	37
	ランゲンドルフマンドリンオーケストラ (ドイツ)、立命館大学マンドリンクラブ												(11/23)	92
	下見学生会												(11/28)	118
	世界報道写真展2010—WORLD PRESS PHOTO 2010—												(12/4)	121
	公開記念講演会 國森康弘氏 (フォトジャーナリスト) 『世界の紛争と貧困を撮る』(衣笠キャンパス 以学館6号教室)												(12/11)	482
	公開記念講演会 森住卓氏 (フォトジャーナリスト) 『戦争は続いている～イラクの戦後と沖縄基地問題～』												(3/1～3/20)	851
	映画上映「ひろしま」(衣笠キャンパス 以学館2号ホール)												(3/23)	249
	ピース☆コレクション 公開記念講演会 「どう使う?平和ミュージアム」(国際平和ミュージアム 2階会議室)												(3/26、3/27)	120
	角田将士准教授 (立命館大学産業社会学部)、高松智行教諭 (横浜国立大学附属鎌倉小学校美術教育)													
	Mustafa Said レクチャーコンサート 国境を越えて平和に捧げる (国際平和ミュージアム 1階ロビー)													
	立命館創始140年・学園創立110周年記念 公開講演会 (衣笠キャンパス 以学館2号ホール)													
	「わだつみ不戦の誓い」鼎談 中村はるね氏 (産婦人科医師) × 東ちづる氏 (女優) × 安斎育郎名誉館長													
映画上映「しかしそれだけではない 加藤周一幽霊と語る」と対談 桜井均氏 (映像学部客員教授) × 安斎育郎名誉館長														
立命館創始140年・学園創立110周年記念・APU 開学10周年記念														
アジア太平洋学長平和フォーラム (衣笠キャンパス 創思館カンファレンスルーム)														
「韓国併合」100年特別展「巨大な監獄、植民地朝鮮に生きる」主催：立命館大学コリア研究センター (中野記念ホール)														
緊急特別講演「福島原発事故による放射能災害と私たちの生活」講演：安斎育郎名誉館長 (中野記念ホール)														
第24回京都漢字探検隊 漢字あそび大会 (中野記念ホール)														
小計														4,815

編集
後記

crisisという言葉には「危機」の他に「転機」「運命の分かれ目」という意味があります。3月11日の東日本大震災、そして福島原発事故から、私たちの日常が「危機」を迎えると同時に、大きな「転機」を促されているように思います。経済成長や技術革新ではなく、人間が安心して暮らせる社会を作り出していくために何が出来るのかを自らに真剣に問うことが求められています。

おそらく被災地の復興や原発事故の収束には、まだまだ時間がかかることでしょう。その間に脅かされ続ける人間の生存の危機から目をそらさずにこの災害に立ち向かう忍耐力が求められています。果たして私たちは、簡単に希望を語る事が許されるのでしょうか。

遅々として進まぬ復興支援、政治の混迷、避難生活をしている人々の苦境を前にして、ときには暗い気持ちになりますが、そんなとき、いち早く被災地支援のために行動を開始した学生達がいたことを思い出します。彼らの行動は必ずしも大きな力とは呼べないかもしれませんが、そこには、この「危機」を必ず「転機」とすることができる、と信じることを許すような未来への小さな芽吹きがあるように思います。

来年、国際平和ミュージアムは開設20周年を迎えます。戦争や現代の諸問題の展示を続けていくことはもちろんのことですが、この新たな状況の中でミュージアムに何が出来るのかが問われることとなります。希望を語る事が困難な状況の中で、それでも未来の世代を信じて、来るべき彼らとともに歩み続けたいと思います。

加國尚志

※ 本誌に掲載されている情報・写真等の無断転載はおやめください

ミュージアムインフォメーション

2011年度秋季特別展

「フリーモ・レーヴィーアウシュヴィッツを考えぬいた作家ー」

会 期：2011年10月22日(土)～12月17日(土)
9：30～16：30 (入館は16：00まで)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール
休館日：月曜日、11/4(金)、11/24(木)
参観料：大人400円(350円) 中・高生300円(250円)
小学生200円(150円)
上記()内は20名以上の団体料金です。
特別展の入館料で常設展も併せてご覧いただけます。

開催趣旨

フリーモ・レーヴィーを知っていますか？
北イタリアの都市トリノのユダヤ系家庭に生まれたレーヴィーは化学者への道を志し、トリノ大学に学びました。しかし、ファシズムの嵐が吹き荒れる1944年、ナチスに抵抗するパルチザンに参加する中で捕らえられ、ユダヤ人であるためにアウシュヴィッツへ送られました。
強制収容所の地獄の体験から奇跡的に生還したレーヴィーは戦後、化学者として働くとともに、『アウシュヴィッツは終わらない』をはじめアウシュヴィッツの意味を問う作品を著し、作家として活動しました。
レーヴィーの作品や証言は深い洞察に満ち、人間の暴力性や、暴力により徹底的に痛めつけられた人間がそこからどのように回復するのかを考える際の貴重な手がかりとして現在も広く世界で読まれています。レーヴィーの思想は日本でも思想家や芸術家をはじめ、多くの人々に影響を与えてきましたが、2011年3月以降、私たちが世界に向き合う際の手がかりともなるものと考え、本展を開催するものです。日本で初めての本格的なフリーモ・レーヴィーの展覧会へぜひご来場ください。



自転車に乗るフリーモ・レーヴィー (1941年)
写真提供：レジスタンス・強制収容・戦争・諸権利・自由普及博物館 (イタリア)



写真提供：マッシモ・ダゼリオ古典高校

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム
協 力：イタリア文化会館、フリーモ・レーヴィー研究センター、立命館大学文学部
後 援：イタリア大使館(予定)、京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会
京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局、KBS京都、朝日新聞社、京都新聞社
毎日新聞社、読売新聞大阪本社、朝日新聞出版、岩波書店、言叢社、NPO京都コミュニティ放送
監修・協力：竹山博英(立命館大学文学部教授)

講演会のお知らせ

公開記念講演会

- 11月 5日(土) 「フリーモ・レーヴィーアウシュヴィッツを考えぬくことー」
講師：竹山博英氏 (立命館大学文学部教授)
- 11月12日(土) 「断絶の証言者フリーモ・レーヴィー」
講師：徐京植氏 (東京経済大学現代法学部教授)
- 11月19日(土) 「『人間であることの恥』ふたたびー2011年の経験から」
講師：鵜飼哲氏 (一橋大学大学院言語社会研究科教授)

コーディネーター：加國尚志 (立命館大学国際平和ミュージアム副館長、立命館大学文学部教授)
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1階ロビー
時 間：各日とも 13：30～15：00 (開場13：00)

● 詳細はホームページでお知らせいたします。

ミュージアムインフォメーション

特別展

世界報道写真展2011 ~WORLD PRESS PHOTO 2011~

開催趣旨

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している「世界報道写真コンテスト」の入賞作品約200点で構成した写真展で、今年で54回目を迎えます。4月のオランダ・アムステルダムを皮切りに世界45の国と地域、約100都市で開催される世界最大規模の写真展です。いま、この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真家たちの作品の数々は、人々に現実を強く訴える力を持っています。時に命がけで撮影された報道写真を間近でご覧いただくことで、世界の現状を知り、いま一度平和とは何かを考えるきっかけにさせていただきたく開催するものです。



【世界報道写真大賞】
ジョディ・ビーバー（南アフリカ／2010）
逃亡の罪でタリバンに刑を宣告され、夫に
耳と鼻を削ぎ落とされたアフガニスタンの女性

【京都】

会 期：2011年9月21日（水）～10月16日（日）
※休館日：9/24（土）、9/26（月）、10/3（月）、10/11（火）
会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール
開館時間：9時30分～16時30分（入館は16時まで）
参 観 料：大人500円、中・高生300円、小学生200円
公開記念講演会：
日 時：10月4日（火）14：40～16：10（公開授業）
会 場：立命館大学衣笠キャンパス 存心館801号教室
講 師：豊田直巳氏（フォトジャーナリスト）

【滋賀】

会 期：2011年10月18日（火）～11月3日（木）（会期中無休）
会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス（BKC）エボックホール
開館時間：9時30分～16時30分（入館は16時まで）
参 観 料：大人500円、中・高生300円、小学生200円
公開記念講演会：
日 時：10月18日（火）12：15～12：45・11月3日（木・祝）12：15～12：45
会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス エボック立命21
講 師：國森康弘氏（フォトジャーナリスト）
（京都・滋賀開催分）
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、世界報道写真財団
後 援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会、公益社団法人日本写真家協会
京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会
NHK京都放送局（衣笠キャンパス開催分）、KBS京都
滋賀県、草津市、大津市、滋賀県教育委員会、草津市教育委員会、大津市教育委員会
NHK大津放送局（びわこ・くさつキャンパス開催分）、びわ湖放送株式会社
協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社、ティエヌティエクスプレス株式会社

【大分】

会 期：2011年11月6日（日）～11月20日（日）（会期中無休）
会 場：立命館アジア太平洋大学（APU）本部棟2階 コンベンションホール
開館時間：10時～17時（入館は16時30分まで）
参 観 料：大人500円、高校生以下無料
主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、立命館アジア太平洋大学、朝日新聞社、世界報道写真財団
後 援：オランダ王国大使館、公益社団法人日本写真協会、公益社団法人日本写真家協会
協 賛：キャノンマーケティングジャパン株式会社、ティエヌティエクスプレス株式会社
※後援、協賛は2011年7月末時点

第19巻第1号（通巻53号） 2011年8月25日発行



立命館大学 国際平和ミュージアムだより

編集・発行

立命館大学
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>